東京歯科大学大学院歯学研究科

大学院だより



平成23年度大学院新入生学内総合セミナーにて

平成23年度大学院新入生 学内総合セミナー開催

今年度の大学院新入生総合セミナーは3月11日 に発生した東日本大震災の影響から、例年と異なり 大学院新入生学内総合セミナーとして、講演、個人 発表、グループ討議を主体に、5月26、27日の2 日間のスケジュールで千葉校舎実習講義棟にて開催 した。

始めに開講式として、井上研究科長から挨拶と本 セミナーの開催目的について説明を行った。次いで、 オリエンテーションと新入生全員による自己紹介を 行った。その後、本学オーラルメディシン・口腔外 科学講座の片倉 朗教授から「位置づけを意識した 研究を・臨床から基礎への展開」と題したご講演を 頂いた。大学院生時代の研究テーマや留学の経験が 現在の研究テーマにどのように結びつき、臨床とど のように関連しているかを自らの体験を通じてお話 し頂き、大学院生にとって研究の意義を考える上で 大変ためになる講演であった。講演後、受講した院 生は講義まとめを作製、提出することで、理解を深めていた。

次に、口腔科学研究センター情報支援部の新谷益 朗准教授からグループ討議の課題が提示された。課 題は、被検者のプライバシーと匿名性の保護につい てであり、顔貌写真の取り扱いを題材に、各グルー プに共通課題と個別課題が提示された。各グループ で個別に打合せが行われ、明日の討論が確認された。

2日目は、前日の課題に対してのグループ討議が 行われ、昼食を挟んで、プロダクツの提出と、各グ ループの成果が発表された。グループごとに特徴の ある意見が提出され、研究や医療の社会的側面を認 識させる上で、有意義な討論が行われたと言える。

次に昼食を挟んで、課題として出されていた英文 学術誌の内容発表が3班に分かれ、全員が参加する 形で行われた。英語論文の理解に苦労したとの感想 もあったが、パワーポイントを用いて論文を紹介し、 さらに評価するという始めての経験に、多くの質問があり、有意義な経験となったと言える。

最後の講演は、免疫学を永年にわたりご研究なされた埴生園子順天堂大学医学部客員教授に、「胸腺に魅せられて」と題してご講演を頂いた。30年間にわたる研究生活の中で行き詰まったときに、どのように考え、実行したかを女性研究者の状況にふれながらのお話であった。質疑では、女子大学院生か

らの研究生活に対する質問も多く、その意味でも大変有意義であった。

本年は学内で行われ、2日間という短い時間であったが、移動時間が少なく充実した時間をすごすことができたと言える。今後の研究生活、臨床研修において科学的思考の重要性を理解する契機となり、また、新たな友人とのコミュニケーションが有意義な大学院生活の支えとなることは確実である。

平成23年度大学院新入生 学内総合セミナー 概要

実施日:平成23年5月26日(木)~27日(金)

出席者:井上大学院研究科長、東大学院教務部長 末石大学院学生部長、新谷大学院教学担当者 口腔科学研究センター職員、学生課職員

第1日目

実習講義室III(実習講義棟3階)

13:00 - 13:15	開講式:大学院研究科長挨拶
13:15 - 14:40	オリエンテーション
	自己紹介
14:50 - 16:00	講義1:片倉朗教授
	(オーラルメディシン・口腔外科学講座)
16:00 - 16:10	講義1のまとめ
16:20 - 17:30	課題に対する討論
	課題呈示とグループ別打ち合わせ
18:30	懇親会 (ホテル・ザ・マンハッタン)

第2日目

実習講義室 I (実習講義棟2階)

第10-12セミナー室 (実習講義棟1階)

9:00 - 11:05	課題に関する討論(グループ別討議)
	第10-12セミナー室
11:15 - 12:00	グループ別発表
	実習講義室I
12:00 - 13:00	昼食
13:00 - 15:00	選択英語論文についての発表
15:15 - 16:25	講義2:埴生園子客員教授
	(順天堂大学医学部免疫学)
16:25 - 16:35	講義2のまとめ
16:35	閉講式、全体集合写真撮影



自己紹介 『私の一番○○○なこと』



参加大学院生

福田 真之 解剖学

山根 茂樹 解剖学

阿部 裕之 薬理学

月野和 隆 歯科保存学

今村健太郎 歯周病学

喜田 大智 歯周病学

逢坂 竜太 口腔外科学

加藤 宏 口腔外科学

小郷 直之 口腔外科学

重政 理香 口腔外科学

林 宰央 口腔外科学

若杉由美子 歯科麻酔学

正村 綾 歯科麻酔学

岡本 聡太 歯科麻酔学

梅澤 朋子 有床義歯補綴学

和田 健 有床義歯補綴学

小泉ちあき 有床義歯補綴学

太田 緑 有床義歯補綴学

荻野 崇真 有床義歯補綴学

西村 逸郎 クラウンブリッジ補綴学

森川 泰紀 歯科矯正学

惣卜 友裕 歯科矯正学

井口 直彦 オーラルメディシン・口腔外科学

矢島 由香 オーラルメディシン・口腔外科学

村上 正治 オーラルメディシン・口腔外科学

鈴木 大貴 オーラルメディシン・口腔外科学

小林 史卓 臨床検査病理学

武田 侑大 臨床検査病理学

白井 亮 口腔インプラント学

平野 友基 口腔インプラント学

岩田 優行 口腔インプラント学

吉田 光孝 口腔インプラント学

松田 裕也 口腔インプラント学

吉田 香織 口腔健康臨床科学(歯科麻酔学分野)

本田 至史 口腔健康臨床科学(歯科麻酔学分野)

講演1 「位置づけを意識した研究を・・・ 臨床から基礎への展開」

オーラルメディシン・口腔外科学講座 片倉 朗

私は卒業後に大学院に進学し口腔外科学を専攻し た。既に学生時代から口腔外科の講座で実験癌モデ ル作成の研究の手伝いをし、口腔癌についてはその 治療だけでなく発生にも興味を抱いていた。丁度そ の頃、我が国独自の経口抗癌剤として UFT (大鵬薬 品工業)が発売され、口腔癌への適応拡大を模索し ていた。UFT は代謝拮抗剤である 5-FU の肝臓での 分解を遅延させることにより血液中に抗癌効果の主 体となる Fdump を徐放させることで、抗癌効果を 持続させかつ副作用を軽減させる経口の抗癌剤とう いうことでその需要を伸ばしていた。私は固形癌で しかも様々な形態を呈する口腔癌に代謝拮抗剤であ る UFT が効果を示すものかと大きな疑問を抱いて いた。そこで自ら恩師である野間弘康教授に実験モ デルによって UFT の抗癌効果を検証したい旨を申 し出て研究が始まった。

ラットの心耳から生体墨汁をかん流して血管鋳型 標本を作成しラジオアイソトープと合わせて観察するという手間、時間、熟練を必要とする実験だった が、血管構築の違いによる効果の差が明確となった。 私は舌癌の血管形態を観察するのに1カ月以上かか



りヒトには応用できなかったが、現在ではオリンパス社製の Narrow Band Imagining system (NBI) により口腔癌の血管構築を直接リアルタイムで観察できるようになって、柴原教授をはじめ口腔外科学講座では臨床に応用している。研究はまさに日進月歩であるが、私の実験結果と同様の所見が得られていることが嬉しい。今日の医用工学は基礎研究を臨床に還元する重要な手段であると深く感じる。

歯科医学の研究は成果が患者に還元されて目的が 達成される。それゆえ常に臨床で疑問を持ちそれを 科学的に解決する思考と手段を身につけておく必要 がある。私は研究では口腔癌を専門にしているが、あるテーマを考える時に問題は「診断」「治療」「予防」「疫学」のどの領域でどこをターゲットに行えば解決できるかを考える。さらに同じ半径で一周させて最終的に4つの領域を同じレベルで統合してゆくように研究計画を立てるようにしている。それによっていわゆる Translational research が完成される。

私の大学院当時の研究もいま行っている唾液による口腔癌のスクリーニング検査と前癌病変の薬物治療の研究も、「現場の疑問」と「患者のために、第一線の歯科医師のためにこういうことが実現できたら」という発想から始めた。大学院ではまず仮説を立ててそれを立証することを訓練されるが、将来はまず現場のニーズを知りそれを解決するための研



究を進めてほしい。今後はさらに研究の専門性は高まっていくであろう。学位記を手にした後も領域を越えて問題を解決してくれるのは今一緒に研究している仲間である。仲間の実験を手伝い大いに議論しておこう。

課題講義「望ましい症例写真のあり方」

口腔科学研究センター情報支援部 新谷益朗

平成23年度から、大学院歯学研究科の履修カリキュラムが大きく変更された。大学院では国際的に活躍できる研究者を育てることをミッションの一つとしており、研究者のみならず歯科医師としても海外に通用する高いレベルの意識を体得することを目標としている。このために新しいカリキュラムでは、臨床や基礎にとどまらず、医学生物学における研究倫理や研究成果の発表の手法についてもプログラムを設けている。

ヘルシンキ宣言「人間を対象とする医学研究の倫理的原則」およびリスボン宣言「患者の権利に関する宣言」にも謳われているように、すべての医学研究には患者や被験者の尊厳と権利の保護が第一に



求められている。また個人情報保護の意識が近年高まるにつれて、氏名においては完全な秘匿が求められるのはもちろん、年齢、性別、居住地等の情報については、必要のない記述は行わないことが当然となっており、学会や学術雑誌もこうした流れをうけて、投稿規定や編集方針の中に患者・被験者のプライバシーと権利の保護について明確なルールを設けるようになってきている。

一方で歯科領域、とくに口腔外科学、歯科矯正学、 歯科補綴学をはじめとする分野においては、患者ま たは被験者の顔貌写真が症例報告論文や学会発表等 において呈示される例が多く、これは医学系を含め た他の領域分野よりもたいへん高い頻度で認められ る。このような顔貌を含めた症例写真においては、 患者・被験者が特定されることを防ぐ目的で目隠し が書き込まれているものが多いが、欧米諸国とわが 国では目隠しの必然性の解釈と意識に大きな隔たり があるように思われる。

顔貌写真の眼部に黒い目隠しを書き込むことで、 被写体の匿名性を保護する方法は古くから行われて きたが、このような目隠しには隠蔽効果がないこと を、アメリカの皮膚科医 Slue が論理的な実験によっ て証明している (Slue, WEJr. NEJM 321(8):550551, 1989)。さらに Slue は、顔面部の症例写真では、 眼部周囲を含めないことですでに被写体を知る人に 対しても匿名性の保護効果が飛躍的に増大すること から、可能な限り患部に限局した写真を用いること を提案した。

ICMJE (International Committe of Medical Journal Editors) が掲げている医学生物学雑誌投稿統一規定には、患者被験者のプライバシーと匿名性の保護についての項目が加えられ、医学雑誌に発表される論文に用いられる症例写真においては、十分な匿名性の保護についての配慮が求められること、顔貌写真においては目隠しは無効であるから用いないことが提言されている。

この提言以降、欧米の多くの医学雑誌では目隠しのある顔貌症例写真は少なくなり、必要のない限り患部周辺に限局した症例写真を用い、眼部を含めることが不可欠である場合に限って患者の了承を得て目隠しのない症例写真を掲載するケースが増えてきている。しかしその一方でわが国では、このような国際的な流れに逆行するかのように、必要がないにもかかわらず眼部を含めて呈示している症例写真や、不適当な目隠しが書き込まれた症例写真が増加している現状がある。

もちろん臨床の現場では、患者に対して十分に時間をかけた説明を行い理解と承諾を求めることは現実には難しい問題が多い。症例写真の公表について同意を求めることが患者と担当医の信頼関係を損ねてしまう場合もある。最近は臨床研究がますます大規模化し、複数の研究拠点で多数の被験者を対象に共同研究が行われる傾向にあり、すべての対象者から完全なインフォームド・コンセントを獲得するこ



とは困難な点がなお多く、そのことが臨床研究や診療の足かせになっている現実を認識する必要もある。

しかしそのような臨床の現場が抱える問題背景とは関係なく、必要のない範囲の顔貌の露出や、不適切な目隠しの増加については、患者・被験者の権利の保護における医療者側の意識の向上と適切な配慮が必要であるのは言うまでもない。

以上の講義を課題提起として行い、3つのグループが2時間のグループ内討論の後、10分間のプレゼンテーションと質疑応答を行った。

短い時間の討論で意見を出し合い、グループ内での合意的な理解を形成するためには、やや複雑な問題点を多く含んでおり、自然科学的な思考だけではたやすく解決しないテーマであったが、これまで大学院生があえて振り返る機会が少なかった問題について、全員が意識を向けるよい機会となったのではないかと思う。大学院での研究生活をスタートした大学院生が、古い慣習や固定化した概念にとらわれることなく、自由な発想で新しい時代の歯学研究の世界に踏み込んで行くきっかけを、この討論の中から見いだしてくれることを期待している。

個人発表(英語論文を読んで)

本年度大学院新入生には、総合セミナーにおいて各自、関心のある英文文献を選び、当日セミナーにおいて全員が内容を紹介することを事前に通知した。特に、文献を選択した理由および発表した論文に対する自分の評価をスライドにまとめ10分で発表、今後の自分の研究との関連についても触れることを指示した。新入生は各班において、各班指導者

の司会のもと全員が発表することを義務づけた。

講評 井上大学院研究科長

英文論文を読むことに慣れていないことは否めないが、興味のある文献なので良く調べていた、さらに視聴学生も興味を持って聞いていたという印象が強かった。研究科長として、これからの4年間に辞

書を引くことなく、論文を黙読把握でき、また英語による学会発表、討論、論文発表ができるよう指導する所存である。

講評 末石大学院学生部長

初めて英語論文を読んだものもいたが、熱心に取り組み、良く理解しているように思われた。プレゼンテーションは大学生でのPBL教育の成果か、大きな失敗もなく行えていた。統計に関しての知識や論文の批判的評価、臨床的な意味付けについては今後の取り組みに期待したい。

講評 東大学院教務部長

各自、取り上げた論文はよく読み込んで、発表も すべて時間内に収まり、概ね順調でありましたが、 質疑応答についてはまだまだ積極的な者が偏りがち なのでできるだけ質問を促しました。学会、発表会 等でも常に質問をする姿勢が研究者としての成長に 重要であることを自覚していってほしいものです。



新谷大学院教学担当

担当する指導教員から適切なアドバイスがあったのか、up-to-date な論文を選んで発表した大学院生が多かったことが印象に残る。自分の研究テーマに関連するものだけに限らず、面白そうな論文やちょっと風変わりな論文を探しては、楽しんで読むことが論文読みの上達の秘訣。どんどん数をこなしていってほしい。

講演2 「胸腺に魅せられて」順天堂大学医学部客員教授 埴生園子先生

(東大学院院教務部長記)

垣生園子先生は慶応義塾大学医学部大学院入学以来一貫して、未知の臓器であった胸腺の研究に打ちんでこられた。講演ではまず、免疫における重要な自己認識における胸腺の役割を解明し、胸腺細胞の多くがごく初期に大量にアポトーシスにより負の選択をうけること、そして特にT細胞が骨髄の多能性造血幹細胞から前駆細胞として生まれ、血流を介して胸腺に定着し成熟すること、また胸腺に存在する



胸腺上皮細胞(胸腺ストロマ)により分化選択を調節されていること、このストロマ細胞は Notch という物質をもち、前駆細胞を T 細胞へ分化誘導すること、さらに B 細胞における免疫グロブリンの組み換え機構における RAG タンパク質の役割の解明とノックアウトマウスの作成についてのわかりやすいお話があった。

質疑応答においては、現在の社会環境において研究者が常に結果を求められ、結果により研究費が支給される現状があること、研究の初心者はまずは研究費を持つ指導者の指導に基づいて研究を始める必要があるが、指導通りやったつもりでも9割はうまくいかないしそれが普通であること、したがって地道に粘り強く工夫を重ねながら何度も繰り返して結果が得られるものであることをご説明された。

またご自身が慶応義塾大学医学部の初めての女性 大学院生であったこと、その後研究者として進むう えで女性として困難を感じた事とそれに対してのご 自身の姿勢を熱く語られた。そのなかで大学院生で あるうちは女性であれ男性であれ差別は受けないこ とを説明され、近年ますます増加している本学の女 性諸君も多いに関心を示し熱心な質疑が続けられた。

最後に海外留学とその後の研究者としての歩みの 中、留学先の教授が日本で女性で研究者として歩む 将来を心配して、日本の研究者へ紹介状を書いてくれた話をまじえ、その紹介状を持って学会場で直接話をして研究の場を獲得していったことなど先駆者としてのご苦労、と常に積極的にかつ柔軟に研究生活を進めていったことを話された。

懇親会風景







初日の夕刻は、会場をホテル・ザ・マンハッタン 幕張に移して、懇親会を開催した。井上大学院研究 科長の挨拶に続いて東大学院教務部長の乾杯で開会 し、和やかな雰囲気で教職員と大学院生の間に会話 が弾む中、無事閉会を迎えた。

編集後記

大学院だよりとして、5月に行われた平成23年度大学院新入生学内総合セミナーについて報告いたしました。東日本大震災の影響で例年とは異なる開催となりました。懇親会では会話も弾み、多少羽目を外したものもおりましたが、講演とグループ討議、個人発表では皆熱心に取り組んでいました。社会人大学生もおり出身大学も異なるなど、多様性のある中で支え合い、切磋琢磨して歩むきっかけとなってくれる事を期待しています。(末石 記)

